

令和元年度 奈良市立都跡こども園 研究実践概要

園長名 山中 理恵子
全園児数 154名

1. 研究主題 “したい” から始まる子どもの遊び
～一人一人の子どもの心の動きを見つめる～

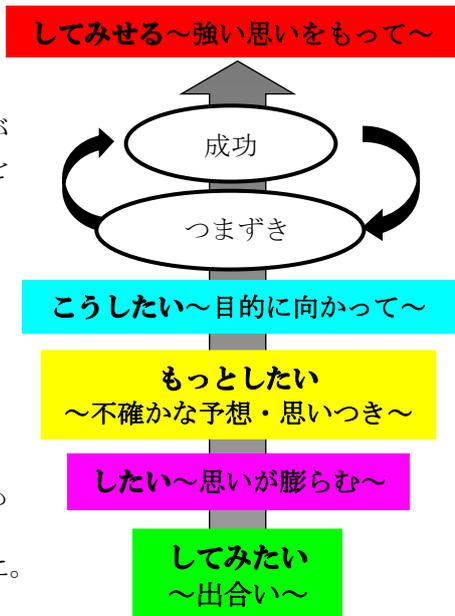
2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

子どもたちは、遊びの中でまず“したい”と感情が動いているからこそ、いろいろなことに気付き、思考する姿へと繋がっていくのではないかと捉えた。子どもを見ることなくしては適切な援助や環境構成を語れないことへの基本に立ち、子どもたちが、何に心を動かされ、どんな気付きや面白さを感じているのかを読みとり、子ども理解に努めることにした。

4. 具体的な研究内容

- ①研究のねらい
 - ・遊びの中で主体的にもの・人・ことに関わり、何に心が動き、どんなことを感じているのかを探り、自ら遊びを創る子どもを育てる。
- ②研究の重点
 - ・研究主題に沿った各期の事例を持ち寄り、心が動くプロセスを年齢ごとに分析する。
 - ・“したい”の心の変容を読みとり、どんな気付きや学びがあるのか探る。
- ③活動の方法
 - ・“したい”の思いが右図のように変化していくのではないかと仮説を立てた。各学年ごとの実践事例を、子どもたちの動きや言葉、表情から、“したい”の思いがどのように変容していくのか、以下のように示し、分析した。



【心の変容】

してみたい
したい
もっとしたい
こうしたい
してみせる

【心の動きとその読みとり】

〇3歳児（6月） 事例1「ピシャーってなるねん」

4、5人の子どもが園庭の木陰にある小高い築山に登ったり、スコップやおたまを使って穴を掘ったり、水を入れて『足温泉』と、足を入れてみたり、水を山から流してみたり、自ら山を転がってみたりするなど、思い思いに遊んでいた。

足温泉に登ってきたA児。2人の子どもが足温泉の端から端に向かって跳び越える度に「できた！」と、喜ぶ様子を、じっとにこにこしながら笑顔で見ていた。①「わあ！楽しそう！先生もやりたい！」と、保



育者もしてから、「A君もやってみる？」と、誘いかけると、A児は足温泉の端に立ち、跳んでみた。

が・・・。

温泉の中に足がはまった。一瞬、動きが止まるが、ニヤリと笑った。保育者はA児と顔を合わせて、同じ表情をし、「おお！すごい！どうなったの？」と聞くと、「ピシャーってなるねん」と、答えた。A児は、跳び越えるのではなく、足温泉の真ん中に何度も跳び込んだり、口で「ピシャー」と言ったりしながら、跳び出した。



側にいたB児も「わあー、ピシャーや」と、A児と同じように足温泉の端へやってきて、保育者と一緒に水がなくなるまで楽しんだ。

《考察》

木陰にある小高い築山が子どもの“したい”と感じる魅力的な環境になった。足温泉で遊んでいた子どもの様子を笑顔で見ていたA児に、保育者が誘いかけ、一緒に楽しみながら遊んだことで、してみたい気持ちが生まれた。足が温泉につかったことで、予想しない出来事が起こり、水しぶきがはねあがったのを見たのか、音が良かったのか、足にかかって気持ち良かったのかなど、様々な要因がA児の心を動かし、“したい”に繋がった。A児の面白いと感じたことに保育者が寄り添ったことで、全身で面白さを感じ、水がなくなるまで存分に繰り返して遊んだ。さらに、その姿がB児の心を動かし、“したい”に繋がった。

〇4歳児（11月） 事例2「ドングリチャンピオン」

奈良公園の鹿の冬場のエサにするため、ドングリを拾いに平城宮跡へ園外保育に出かけている。事前に鹿が落ちているゴミを食べ、病気になっている話を子どもたちに知らせたところ、「ゴミじゃなくご飯一杯食べられるようにドングリいっぱい集めよう」と、友達と話しながらドングリを拾っていた。持ち帰った袋を覗き、友達と見せ合う姿があったので、見えやすいように箱やカップなどを用意した。「じゃあ、箱に出してみる」「私、牛乳パックにする」と、それぞれ好きなものに入れ、模様や色などの違いを話しながら触っていた。

その中でC児「ぼくとD君のどっちがいっぱいあるかな？」と、平らな箱と牛乳パックに入れたドングリを見ていた。C児「どっちか分からへんね」と悩んでいると、D児「あっ！分かった！玉入れみたいに数えたらいいねん」と思いつき、2人で一緒に数えてみることにした。最初は上手くいっていたが、ドングリが転がったり、途中で数を飛ばしたりするなどして、最後まで数えられずD児「分からなくなってきた」と、途中であきらめてしまった。周りの様子に気付けるように①「みんなもいろんな物にドングリを入れてるね」と知らせると、周りの様子を見て、D児「じゃあ、同じ箱に入れたら分かるかな？」と、牛乳パックを2つ持ってきた。C児「どっちが多い？」と比べてみるが、外から見るとよく分からなかった。どうしたらいいかと悩んでいる中でD児「あっ！分かった！」と思いつく。D児「透明のに入れたらいいねん」C児「そっか！そうしたら分かるかも」と、透明の容器を探し出す。探している様子を見て、①「これならいっぱいあるよ」と同じ大きさのペットボトルを用意した。入れてみると透明で見えやすくなった。C児「あっ！D君の方が高い！」D児「やった！いっぱいや」と、比べられて嬉しそうにしている。「私もしたい」と他児も加わり、みんなでペットボトルを並べて比べてみることにした。すると、E

跳んでみたい

うん？（驚き）

気持ちいい
（喜び・楽しい）

ピシャー！（面白い）

もう一回跳びたい

私もしたい

いっぱい集めたい

触れたい

いろんなドングリが
ある（気付き）

どっちが多いのか
比べたい

数えてみる？
（思いつき）

分からなくなった
（戸惑い）

周りを見てみよう
（知りたい）

同じ物に入れて
みよう（試す）

見えない！何で？
（疑問）

透明のに入れたら
分かるかも（予想）

見えた！（喜び）

誰が一番多いのか
比べたい

児のドングリが一番多く、D児「一番いっぱいやね」C児「ドングリチャンピオンや」と、みんなで盛り上がった。

《考察》

園外保育の前に鹿の様子を話したことでたくさん集めたい思いが芽生え、さらに集めたドングリにたくさん触れる中で、比べたい思いが出てきた。どうしたら比べられるのか、今までの経験をいかしたり、友達と一緒に思いついたことを試したりしたことで、“誰が一番多いか比べたい”という目的をもつようになり、多い少ないことを感覚的に捉え気付き姿にも繋がった。

○5歳児（5月～7月）事例3「やっぱり曲がるコースにしたい！」

トイや波板を組み合わせたコースで水を流して遊んでいた。水が勢いよく流れる様子から「急流すべりみたい」と、つぶやいたことがきっかけとなり“急流すべり遊び”が始まった。ビールケースを積み重ねて傾斜のコースをつくり、つくった船を水の勢いで進ませようとコースや流す水の量を調節するなど試行錯誤が始まった。船は、箱や牛乳パックでつくと濡れて壊れてしまうことに気付き、ものの性質を考え何度もつくりなおしていた。曲がるコースにしようと思いつくが上手くいかず、翌日にまっすぐのコースを成功し、達成感を味わうことができた。

F児「今日は、曲がるコースにしよう」G児「スタートは3段にしよう」H児「そうやな」と、3段に重ねたビールケースをスタートに、徐々に傾斜になるように台の高さを調節していく。F児「H君も手伝って！ちょっと斜めにするねん」H児「このぐらい？」F児「下に重ねなあかんねん」と、繋ぎ目で、すのこの重ね方や向きを調節する。F児「ここで曲がるようにしよう」と、友達に伝え、数人で幅が広いすのこを、ほぼ横向きにして繋げる。すのこの隙間から水が漏れないようにビニール袋やレジャーシートを敷き、コースの最後には養生パネルを繋げた。G児「1回流してみようか」という提案に賛成し、数人でタイヤに水を溜めて流してみる。H児「わあー！水が漏れてる」と驚くとみんなが幅広いすのこの前に集まる。G児「本当だ…」F児「どうしようかな…」と、滴り落ちる水を眺める。①「本当だ！漏れてるね。どうしたらいいかな」と、問いかけながら一緒に近くで漏れている様子を見る。H児「ホースで止めよう」と、以前F児が思いついた方法を提案する。それを聞いたG児がホースを持って来て、みんなで水が漏れていた場所に壁になるように洗濯ばさみでとめる。コースのスタートに缶とプラスチックの容器でつくった船を置く。H児「シートをまっすぐにしないと引っ掛かるねん」I児「水は、満タン必要だよ」J児「僕の船は缶でできてるから水に強いはず」と、今までの経験からの気付きを話したり、予想したりする。満タンに溜めたタイヤから水を流すと、船が勢いよく進み始めた。ゴールに向かって身振りしながら願いを込めて「行けー！！」と、進む船を目で追う。保育者も一緒に目で追いながら見守る。カーブのホースが壁となり、カーブを曲がって船が進んだのを見てF児「行った行った！」と、手を叩いて声をあげる。先頭の缶の船が勢いよくゴールまで進んだ。バンザイしたり飛び跳ねたりしながら「大成功ー！」と、喜んだ。②「すごーい！」と、拍手しながら一緒に喜び「何で成功したんだろう」と問いかけ、試行錯誤して成功した要因を振り返る。F児「缶の方が小

誰が多いか分かった！（嬉しい）



コースで水を流したい

急流すべりにしたい

船をつくって進ませたい

曲がるコースで船を進ませたい

まっすぐのコースでしたい

やっぱり曲がるコースにしたい



絶対曲がらせたい！（熱意）

どうにかしないと！（つまずき）

そうだ！（友達の考えを取り入れる）

これでできる！（経験を活かす）

成功させたい（予想）

お願い！進んで！（願望）

やっと成功した！（達成感・感動）

さくて早く進んだ！小さい方がいいってことかな I児「水が満タンだったから」H児「水が漏れないようにしたから」など、気付いたことや考えたことを話した。

これで成功した！
(確認・自信)

《考察》

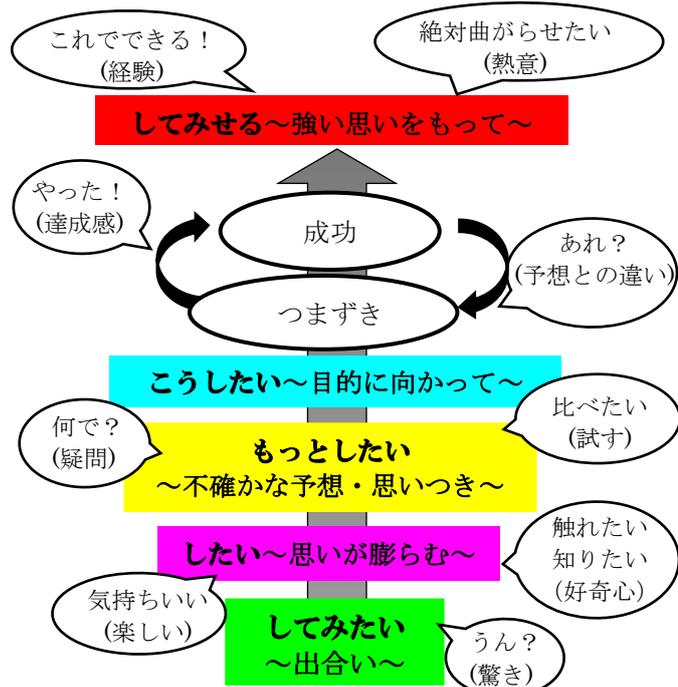
思いの実現に向かって、友達や保育者と一緒に試す中で疑問やつまずきに出会い、達成感を味わうことで、“したい”思いが強くなっていった。また思いに合わせて試せるもの、素材があったことで“そうだ！”“これならできそう”と心を動かし、目的に向かっていった。同じ目的に向かっていく友達と、様々に試せる環境とさりげなく見守り支える保育者の存在があったことで、“こうしたい”“してみせる”と思いを継続させて遊ぶことに繋がった。

5. 研究の成果

・3歳児は感じた思いを素直にありのままに表している。してみたいと思える環境や繰り返し楽しめること、すぐ側で思いを受け止める保育者の存在が、“してみたい”“したい”と、繰り返し五感を通して楽しむ子どもの姿に繋がる。

・4歳児は、気付き、発見をきっかけに、触れたい、知りたい、比べたいなどの“したい”気持ちが芽生え、そこに友達や保育者が一緒にいることで、より関わりを深め、気持ちが高まっていく。思いついたことを考えたり試したりする中で、周りの姿に刺激を受け、疑問や自分なりに考えた予想を繰り返し、“もっとしたい”と友達と一緒に遊びを進めていこうとする姿がある。保育者は、周りに目を向けられるようにしたり、子どもが必要と感じているものを用意したりすることが大切であると分かった。

・5歳児は、今までの経験から“したい”“もっとしたい”という思いをもち、予想とは違う出来事をきっかけに疑問に出会い、“こうしたい”と目的をもつ。保育者は、その思いに向かって試せるものを豊富に用意し、遊びにわりながら見守ることで、子どもは“どうしたらできるのかな？”と考え、素材や用具の特性への気付きや“こうしたらできる”と予想するなど、思いが積み重なっていく。そして、思いが持続できるように励まし、環境を再構成しながら支える保育者の存在があることで、同じ目的をもった友達と考えを出し合い、継続して遊び、ちょっとした成功とつまずきを繰り返し、“もっと”と思いが膨らみ、強い思いになる。“してみせる”と追及していく過程では、今までの遊びでの経験を活かし、“絶対にできる”と確信をもち、“成功させたい！”と根気強く取り組んで、試行錯誤していくことが分かった。また、4歳の時に、この砂場でダイナミックに遊ぶ5歳児の様子を身近で見ていたことも魅力的な環境となり、“したい”と心が動いた要因の1つと考える。



6. 今後の課題

“したい”思いが変化する過程には、子どもたちのいろいろな気付きや学びがあり、それを受け止める保育者の存在や環境が深く関わっていることがよく分かった。子どもを見つめ、子ども理解に努め、学びを読み取ることを引き続き行いながら、“したい”を支える援助や環境構成の在り方について具体的に探り、保育の質を高めていきたい。